

障害者の生活実態と貧困

田中智子（佛教大学）

本日皆さんと考えたいこと

- ・ 障害者の生活の実際と特徴を理解する
- ・ 障害者の貧困とは何かを考える
- ・ 貧困問題の解決の方途を考える

障害者の生活の現状と特徴

- ・ 生活の低水準での画一化
⇒多様性のない生活・広がりのない生活
：その背景として考えられること
 - ① 外出する相手による行き先の違い
 - ② 利用できる社会資源の選択肢の限定
- ・ 家族に包摂される障害者の貧困

ここから言えること

“障害者の暮らしは、家族のケア力+経済力に規定されている”

“障害者の貧困は、家族に包摂されて見えにくくなっている”

- ：①障害者本人の収支は赤字
- ② 障害者の年齢が上がっても（家族は稼働収入→年金へと移行）支出は下がらない（むしろ上がる！？）
- ③ 本人に先駆けて、家族の生活の縮小は生じる
- ④ 家族にも負担は意識化されていない

【第三者の障害】

「ある人の障害が、他の人の社会レベルの問題を引き起こす」

：「本人が病気になる・障害を持つ・あるいは介護が必要な状態になるということが、家族など身近な人々に及ぼす悪影響」 上田敏（1987）『リハビリテーション』医学書院

- ・ ある事件から考える家族の困難

☞☞☞ 家族依存の生活の長期化

「親亡き後」問題とは親の死から「その先」の問題と想定されているが、親にとっての「親亡き後」問題とは、実はその人が生きてきた固有の「これまで」において親としてどのような体験をしてきたか、という問題なのではないだろうか」…「固有の親にとっての「親亡き後」は、そうした固有の体験の積み重ねの先にしかありえないのではないだろうか」

児玉真美 (2017) 「ある母親にとっての「親亡き後」問題」 『障害者問題研究』 Vol. 45 No. 3

“障害者の貧困”とは何か？

「貧困からの自由」＋「発達への自由」

鈴木勉 (2011) 『新版 現代障害者福祉論』

貧困とエイジェンシー（主体性）の問題

「行為における主体性（エイジェンシー）」

：「行為における主体性という考えは普通、自立した、目的のある、創造性をもった、ある程度の選択能力と選択可能性のある行為者としての個人を性格づけるのに用いられる。意識的な行為者としての主体的な感覚は、個人の自己アイデンティティや自己評価の感覚にとって重要である」 ルース・リスター 『貧困とは何か』

貧困問題解決の方途

① 障害者と家族のノーマライゼーションを追求すること

② 障害者・家族を“あたりまえ”の家族にすること

☞☞☞ まずは現実の可視化を！

無年金障害者の会 21回総会

—障害者の生活実態と貧困—

田中智子(佛教大学)

本日皆さんと考えたいこと

- ・障害者の生活の実際と特徴を理解する
- ・障害者の貧困とは何かを考える
- ・貧困問題の解決の方途を考える

障害者の生活の現状

【33歳 男性 家族同居】

1日	買い物	家族と	11日	買い物	家族と	21日	買い物	家族と
2日	買い物	家族と	12日	買い物、基参り	家族と	22日	買い物	家族と
3日	買い物、基参り	家族と	13日	買い物	家族と	23日	参拝、買い物	家族と
4日	買い物	家族と	14日	町内会清掃、買い物	家族と	24日	買い物	家族と
5日	親戚宅、親の趣味の活動	家族と	15日	散歩、買い物	家族と	25日	買い物	家族と
6日	買い物、外食	家族と	16日	買い物	家族と	26日	買い物、親戚宅	家族と
7日	買い物	家族と	17日	買い物	家族と	27日	買い物	家族と
8日	診察、買い物	家族と	18日	散歩、買い物	家族と	28日	買い物	家族と
9日	買い物	家族と	19日	旅行	家族と	29日	買い物	家族と
10日	買い物	家族と	20日	旅行	家族と	30日	買い物	家族と

【41歳 男性 GH】

1日	外食	ヘルパー	11日			21日		
2日			12日	帰省・カラオケ	ヘルパー	22日	スポーツセンター	ヘルパー
3日	公園	ヘルパー	13日	帰省・散歩	家族と	23日	神社	ヘルパー
4日			14日			24日		
5日	帰省・祖母の家	家族と	15日	外食	ヘルパー	25日		
6日	動物園	ヘルパー	16日			26日	公園	ヘルパー
7日			17日			27日		
8日	スポーツセンター	ヘルパー	18日			28日		
9日			19日	ミカン狩り	ヘルパー	29日	スポーツセンター	ヘルパー
10日			20日	帰省・祖母の家	家族と	30日		

【35歳 男性 一般就労】

1日			11日	ゲームセンター	一人で	21日	ゲームセンター	一人で
2日	外食	家族と	12日	ゲームセンター	一人で	22日	ゲームセンター	一人で
3日	ゲームセンター	一人で	13日	外食	家族と	23日		
4日	ゲームセンター	一人で	14日	ゲームセンター	一人で	24日	ゲームセンター	一人で
5日	ゲームセンター	一人で	15日	ゲームセンター	一人で	25日	ゲームセンター	一人で
6日	外食	家族と	16日	病院・ゲームセンター	家族と・一人で	26日	ゲームセンター	一人で
7日	ゲームセンター	一人で	17日	ゲームセンター	一人で	27日	ゲームセンター	一人で
8日	ゲームセンター	一人で	18日	ゲームセンター	一人で	28日	ゲームセンター	一人で
9日	ゲームセンター	一人で	19日	ゲームセンター	一人で	29日	ゲームセンター	一人で
10日	ゲームセンター	一人で	20日	外食	家族と	30日	外食・ゲームセンター	家族と・一人で

障害のある人の生活の特徴

・生活の低水準での画一化

- ・家族同居→“いつもと同じ”生活で安定を図る
- ・GH→本人の余暇に使えるお金が少ない
- ・一般就労→・“友だち”がない
 - ・外出先の限定

⇒多様性のない生活・広がりのない生活

その背景として考えられること

①外出する相手による行き先の違い

- ・家族→一緒に行動できること＋経済力
- ・GH→ガイドヘルパー利用による自己負担の弊害
- ・一般就労→不在

②利用できる社会資源の選択肢の限定

家族に包摂される障害者の貧困

障害者本人の収入

	家族同居	GH	一般就労
基礎年金	72991.0	79316.9	56153.7
賃金工賃	8233.9	8723.9	100469.1
生活保護	0.0	2923.5	0.0
扶養共済	0.0	869.6	0.0
障害手当	3875.0	3435.7	0.0
障害以外手当	216.0	0.0	2805.8
仕送り	1176.5	1889.6	1250.0
その他	85.3	0.0	0.0
合計	86577.6	97139.1	160678.6
最小値	1800	68741	61620
最大値	165401	132982	220306

作業所利用者の1か月の平均支出

	サービス 利用料	サービス 実費	特別出費 月割	ストック	本人支出	本人 固定費	家族等分	支出合計	最小値	最大値
家族同居	2126.1	10417.7	5767.9	13233.5	25616.0	23515.6	40927.8	121604.6	46522	219389
GH	63702.4	8642.0	10012.2	12806.0	18936.8	15680.3	4065.2	133844.9	69120	243522

家族同居の年代別支出

	サービス利 用料	サービス 実費	特別出 費	ストック	本人支 出	本人固 定費	家族等 分	支出合 計
20代 (N=17)	992.4	12275.9	6143.1	13513.8	22664.2	30499.1	29840.1	115928.6
30代 (N=29)	3045.1	10020.2	5659.7	14006.7	24238.4	24176.4	43155.3	124301.7
40代 (N=22)	1790.9	9505.9	5620.8	11997.6	29712.7	17248.1	46559.3	122435.3

GH利用者の年代別支出

	サービス 利用料	サービス 実費	特別出 費	ストック	本人支 出	本人固 定費	家族等 分	支出合 計
20代 (N=4)	68276.8	17150.0	4333.3	17561.0	16648.0	14482.0	9024.0	147475. 1
30代 (N=7)	55900.0	5400.0	8013.9	7142.9	22017.4	9541.2	2947.2	110962. 6
40代(N= 10)	68057.7	8334.0	9975.0	17990.5	17076.5	17340.5	1947.2	140721. 4

ここから言えること

“障害者の暮らしは、家族のケア力+経済力に
規定されている”

“障害者の貧困は、家族に包摂されて見えにくくなっている”

①障害者本人の収支は赤字
平均で月に3-4万円

②障害者の年齢が上がっても(家族は稼働収入→年金へと移行)
支出は下がらない(むしろ上がる!?)

:弾力性の乏しい障害者の生活(GHなど福祉サービスを利用する際の固定的経費)

③本人に先駆けて、家族の生活の縮小は生じる

:「ガイドヘルパーを利用しないとパニックになるので、金銭的には苦しいですが、回数は減らせません」

④家族にも負担は意識化されていない

:「障害者が暮らすのに1ヶ月にいくら必要か？」

→「10万円以下」: 家族同居－49.1%、GH－38.9%

第三者の障害

「ある人の障害が、他の人の社会レベルの問題を引き起こす」

:「本人が病気になる・障害を持つ・あるいは介護が必要な状態になるということが、家族など身近な人々に及ぼす悪影響」

上田敏(1987)『リハビリテーション』医学書院

ある事件から考える家族の困難

【95歳の母親が63歳の知的障害のある四男を殺害した事件】

: 父親の死後、2人暮らしであったが、母親の入院をきっかけに37歳で知的障害者施設へ入所し、60歳で特別養護老人ホームに入所していた。母親は1ヶ月に1回は施設を訪問し、年末年始には一時帰宅をする。一時帰宅の際は、長男と同居する母の自室で共に寝起きをしていた。

→四男を道連れに自殺しようと年末の一時帰宅の際、隣に寝ている四男を腰紐で首を絞め殺したが、自殺は果たせなかった。「自分が生きていて世話ができるうちはよいが、年を取った自分がいつ死ぬかかもしれず、その後に残された四男がどうなるのか不安に思う」

→第一審では懲役3年、第二審で執行猶予4年が確定。その半年後、母は老衰のために死亡した

- 家族依存の生活の長期化
=親にとっては、(終わりの見えない)長い子育て期

子育て期→親なき後？

- 「親亡き後」問題とは親の死から「その先」の問題と想定されているが、親にとっての「親亡き後」問題とは、実はその人が生きてきた固有の「これまで」において親としてどのような体験をしてきたか、という問題なのではないだろうか」...
「固有の親にとっての「親亡き後」は、そうした固有の体験の積み重ねの先にしかありえないのではないだろうか」

児玉真美(2017)「ある母親にとっての「親亡き後」問題」
『障害者問題研究』Vol.45 No.3より

“障害者の貧困”とは何か？

- 「貧困からの自由」+「発達への自由」
＝福祉の実現⇔豊かな暮らし
- 「貧困からの自由」
：貧困に陥る要件の解消
- 「発達への自由」
：その人の持つ発達可能性を全面的に引き出すこと

鈴木(2011)『新版 現代障害者福祉論』

貧困とエイジェンシー(主体性)の問題

「行為における主体性(エイジェンシー)」

:「行為における主体性という考えは普通、自立した、目的のある、創造性をもった、ある程度の選択能力と選択可能性のある行為者としての個人を性格づけるのに用いられる。意識的な行為者としての主体的な感覚は、個人の自己アイデンティティや自己評価の感覚にとって重要である」

ルース・リスター『貧困とは何か』

→貧困の結果として、裁量の限定性

→ケア&人生における閉塞感

貧困問題解決の方途

- ①障害者と家族のノーマライゼーションを追求すること

“子ども” + “夫婦” + “労働者” + “友人” + “仲間” + “女性” + “市民”として...

→多面的な属性で生きること

⇒多層的な人間関係の中で生きること

⇒統合的な人格

⇒“語りたい自分”“物言う当事者”

②障害者・家族を“あたりまえ”の家族にすること

- ・ 変化していく親子関係
 - ：子どもを見守る親→対等な大人同士の関係
 - 子どもから見守られる親

まずは現実の可視化を！

- ・どのような生活を送っているのか？
- ・何ができて(優先的に配分されて)、何ができていない(制限されている)のか？
- ・そこを生きる人たちはどのように感じているのか？